
創薬系バイオベンチャー企業の非臨床研究部門におけるコミュニケーション
とコミットメント

指導教授 岸 真理子教授

2007 年度法政大学大学院経営学研究科経営学専攻修士課程修了

人材・組織マネジメントコース

中村 伸一

本研究の目的は創薬系バイオベンチャー企業の非臨床研究部門において、経営資源の不足を克服するために、どのようにして外部資源の活用と外部情報源からのナレッジの獲得をおこなっているのかを明らかにすることである。そのために創薬系バイオベンチャー企業B社の非臨床研究部門における研究者を対象に、定量的な分析のためにコミュニケーション頻度を調査し、部門内において誰と誰が頻繁にコミュニケーションしているのか、それはプロジェクトグループに関係しているのか、それとも職位や専門分野グループに関係しているのか、また、社内他部門や社外とはどのようなコミュニケーション・パターンを形成しているのかを明らかにした。質的な分析のために、コミュニケーションの頻度だけでなく情報内容についても調査し、特に外部情報源からどんな内容の情報を収集しているのか、その内容はプロジェクトグループや専門分野グループ、職位に関係しているのかを明らかにした。また、プロジェクトグループ、専門分野グループ、職位などの組織特性だけでなく、個人の特性との関係を見るために研究者の組織コミットメントを調査し、組織コミットメントと情報収集行動との関係を明らかにした。

分析にあたって、次の3つの研究課題を設定した。研究課題1は、プロジェクトグループの類似性、専門分野グループの類似性および職位の類似性の中でコミュニケーション頻度と強く関係しているのはどの類似性か。研究課題2は、プロジェクトグループの類似性、専門分野グループの類似性および職位の類似性と外部情報源から収集する情報内容にはどのような関係があるのか。研究課題3は、研究者の情報収集行動(情報源および情報内容の選択)は、研究者個人の組織コミットメントとどのような関係があるのか。

研究課題1から明らかになったことは、コミュニケーション頻度はプロジェクトの類似性に関係しているということである。また、社内他部門とのコミュニケーションでは特定の研究者をコアとしたコミュニケーション・パターンを形成しているが、社外とのコミュニケーションでは特定のゲートキーパーの存在は認められなかった。

研究課題2から明らかになったことは、外部情報源から収集する情報内容は専門分野グループの組織特性に関係しているということである。

研究課題3から明らかになったことは、組織コミットメントが強い研究者のほうが積極的に多くの外部情報源にアクセスしているということである。研究に対するコミットメントが強いと、自分の研究に必要な情報を収集するために自ら進んで外部情報源にアクセスすると考えられるが、B社の非臨床研究部門においては組織コミットメントが強い研究者のほうが積極的に外部情報源にアクセスしていることがわかる。バイオベンチャー企業においては研究に対するコミットメントが強い研究者だけでは外部情報の獲得、吸収、活用が十分ではないため、外部情報源からの情報収集を積極的におこなうためには、組織コミットメントが強い研究者が必要であることがわかった。